

香曾我部義則先生の今月のカルテ 22

# 慢性痛とペインクリニック

急性の痛み、慢性の痛み…あらゆる痛みの診断と治療を専門的に行うペインクリニック。その治療法について、榎木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、分かりやすく説明してくれるこのコラム。第22回のカルテは、交感神経についてです。

2006年最初のコラムに汗をかいたり、心臓がムは痛みと交感神経について早く拍動して、ときどきいたりするのは交感神経孔拡大、筋肉を緊張させ、脳はこの信号を痛みとして説明しましょう。

## 痛みと関連強い交感神経が働き続ける痛みの悪循環 神経を休ませるには、神経ブロックが確実に効果的

交感神経は自律神経の一つで、もう一つの副交感神経とともに身体の中の器官の活動を調整しています。感情的なストレスや不安などで手のひら

■プロフィール こうそかべ・よしゆり 昭和54年3月岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長を経て平成16年4月1日から現職。日本麻酔学会専門医、日本ペインクリニック学会認定医、現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属



香曾我部義則先生

交感神経は特に、痛みとの関連性が強い神経です。指を切ったり骨が折れたりといった刺激が生じると、障害を受けた部位からの信号が脊髄へ、次いで脳へと伝わりま

るように働くのですが、(開胸・開腹・関節手術後、結果として局所の血流低下が生じます。血流が減ると局所に痛みを出す物質(発痛物質)が発生します。血流の悪化と発痛物質の蓄積は交感神経を刺激するため、さらなる血流悪化を招き、痛みの増大をきたします。これを痛みの悪循環といいますが、通常は痛み止めの薬で局所の発痛物質の減少を図り、交感神経や脳への刺激を低下させることで痛みを鎮めることが可能です。痛みの信号が減少すれば次第に痛みを感じなくなり、そのうち神経が活動し続けると難治性の痛みに移行することもあります。

外傷後の神経痛(事故、火傷)、反射性交感神経萎(い)縮症やカウザルギーが代表的な病気です。ほかには手術後痛

(開胸・開腹・関節手術後、結果として局所の血流低下が生じます。血流が減ると局所に痛みを出す物質(発痛物質)が発生します。血流の悪化と発痛物質の蓄積は交感神経を刺激するため、さらなる血流悪化を招き、痛みの増大をきたします。これを痛みの悪循環といいますが、通常は痛み止めの薬で局所の発痛物質の減少を図り、交感神経や脳への刺激を低下させることで痛みを鎮めることが可能です。痛みの信号が減少すれば次第に痛みを感じなくなり、そのうち神経が活動し続けると難治性の痛みに移行することもあります。

外傷後の神経痛(事故、火傷)、反射性交感神経萎(い)縮症やカウザルギーが代表的な病気です。ほかには手術後痛

とができました。本年もよろしくお願ひします。 ■Xモ 問い合わせ先 ☎(2993) 3355代 榎木病院(西花尻)